

談話における結束性とその指導(2)

——冠詞、語一的結束性——

加藤 雅 啓*

(平成12年6月2日受理)

要 旨

英語の母語話者は、ある文が文法にかなった文かそうでないかということを即座に判断できる。これは英語の文法に基づいて瞬時にその文法性を演算し、判断を下すことができるからである。同様に、英語の母語話者は、ある英文の一節を読んだり、聞いたりするとき、それがテキストを成しているか、そうでないか容易に判断することができる。このことから、テキストには、そのまとまりを保証している何らかの特徴や原則が存在し、話し手はこれを手がかりにしてテキスト性を判断している、と考えることができる。本稿では、英語の文章を正しく理解したり、さらに進んで、英語でまとまりのよい文章を書くために必要な言語的手段として冠詞と語一的結束性をとりあげ、談話の結束性という観点から、これらを支えている談話の原則を明らかにし、具体例を挙げて例証する。

KEY WORDS

antecedent	先行詞	article	冠詞
cohesion	結束性	lexical cohesion	語一的結束性
reference	同一物指示	synonym	同義語

0. はじめに

私たちがことばを用いてコミュニケーションを行う際、実際に話されたり、書かれたりしたことばを発話(utterance)という。発話としての文は単独で用いられることはまれで、通例、いくつかの文が連続して意味的にまとまりのある統一体をなしている。このような全体として一つの統一のとれたまとまりのある文の集まりをテキスト(text)という。

しかし、文を単に羅列しただけではそれがテキストを成しているとはいえない。英語の母語話者は、ある一節を読んだり、聞いたりすると、それがテキストを成しているか、そうでないか容易に判断することができる。このことから、テキストには、そのまとまりを保証している何らかの言語的特徴と談話の原則が存在し、話し手はこれらを手がかりにして文章のテキスト性を判断していると考えられる。それでは、何がテキストであり、何がテキストでないかを判断する客観的な言語的特徴とそれを支える談話の原則とはどんなものなのか。本稿では、話し手と聞き手、そして発話の場からなる談話(discourse)という枠組みの中で冠詞と語一的結束性を取り上げ、英語の文章を正しく理解したり、さらに進んで、英語で文章を書いたり

* 言語系教育講座

するとき、まとまりのよいものにするために必要な談話の原則を明らかにし、具体例を挙げて検討していくことにする。

1. 定冠詞：原理はひとつ

学校の英語の授業の中では、冠詞は名詞や動詞などと同じようにひとつの文法項目として学習することになっている。いわゆる学校文法では、文中に現れる定冠詞のさまざまな用法をそれぞれ独立したものとして扱い、個々別々に指導している。ここでは、談話の結束性という観点から定冠詞が談話の中で担っている機能に目を向け、定冠詞の機能的な原理を明らかにする。この原理は基本的には、ひとつの原則からできている。実際の談話の中では、一見、相互に無関係に見える定冠詞の用法も、実はこの原則にしたがって用いられていることを例を挙げてみていくことにする。

1. 1 定冠詞の結束性

談話の結束性という観点から定冠詞を見てみると、三種類の用法、すなわち、その先行詞が場面にある外界照応、先行文脈にある前方照応、後続文脈にある後方照応がある。¹

(1) a. [車のエンジンを説明している場面で] These are *the pistons*.

b. [庭に立って] *The roses* are very beautiful.

(2) George bought a TV and a video recorder. But he returned *the video recorder*.

(3) a. *The people* who predicted a dry summer were disappointed.

(雨の降らない夏を予測していた人々は当てが外れた)

b. *The ascent of* Mount Everest (エベレスト登頂)

(1a), (1b)の *the* は、その指示対象が場面の中にあることを合図しているので外界照応の用法である。(2)の *the video recorder* は先行文脈を参照することにより「ジョージが買ったビデオレコーダー」という解釈が得られる。このような *the* は前方照応の用法である。(3a)の例は、後続文脈にある *who predicted a dry summer* を参照することによってはじめて *The people* がどのような人々か解釈することができる。同様に、(3b)の *The ascent of* Mount Everest を参照することによって、どの山の登頂が明らかになるわけである。このような *the* の用法は後方照応である。このうち談話の結束性に直接に貢献するのは、先行文脈にある先行詞を指示する(2)のような前方照応の *the* である。

1. 2 定冠詞の機能と原則

私たちは中学校や高等学校の英語の授業で、文法項目のひとつのとして冠詞を繰り返し学習した。ところが、いざ英語で文章を書いたり英会話の場面では、依然として冠詞の使用に自信がもてないというのが本音であろう。英語がよくできる人でも、いちばん手こずるのが冠詞である。これはなぜなのか。日本語には英語の冠詞に相当する語いがないため、言語直感が働かず、うまく使えないということもあるであろう。しかし、問題は、むしろ中学校や高等学校の英語の授業での指導方法にあるように思われる。定冠詞については、次のような例を提示して、その基本的な用法を学習するのが一般的である。²

[A] すでに述べられたものを表す場合

I saw a bench in the shade. I went to *the* bench and sat down.

(日陰にベンチが見えた。そのベンチのところへ行って腰かけた)

[B] 周囲の状況でそれとわかるものを表す場合

Shut *the* door, please. It's cold. (どうぞドアを閉めてください。寒いから)

[C] 限定されたものを表す場合

The water of the fountain was cool. (その泉の水は冷たかった)

[D] 最上級を表す場合

Who is *the* tallest boy in this class? (このクラスでだれがいちばん背が高いですか)

[E] 唯一無二と考えられるものを表す場合

The sun set below the horizon. (太陽は地[水]平線の下に沈んだ)

[F] 種類一般(文章体)を表す場合

The owl cannot see well in the daytime. (フクロウは日中はよく見えない)

[G] 慣用を表す場合

People in *the* country rise early in the morning. (田舎の人は早起きだ)

[H] 国民, 公共建築物, 河川, 海洋, 船舶, 新聞, 雑誌, 群島, 国名, 山脈などの場合

The English (英国国民), *the* White House (ホワイトハウス, アメリカ大統領官邸),
the Mississippi (ミシシッピー川), *the* Queen Elizabeth (クイーン・エリザベス号),
The Times (タイムズ紙), *the* Himalayas (ヒマラヤ山脈)

[A]から[H]まで列挙したのは定冠詞の基本的な用法で、文法書にはこれ以外にも多くの用法が解説されている。この指導法の問題点は、このような項目をことごとまかに覚えるだけでも大変な労力がかかる上に、実際に使うだんになるとどの用法が当てはまるのかははっきりせず、依然としてあやふやで自信がもてないことである。それはなぜかという、定冠詞の基本的な機能、すなわち定冠詞は談話の中でどのような役割を担っているかということが十分に理解できていないからである。

安井(1978)によれば、定冠詞のもっとも基本的な機能は、話し手が聞き手に対して「場面、あるいは文脈や一般的な知識の中を探しなさい。定冠詞のついた名詞によって指し示されるものが、それとわかるはずである。」という合図を送っていると考えることができる。³ここでいう「それとわかる」というのは、聞き手がその指示対象を唯一的に確認できるという意味である。これは談話の場面の中に見つけることもあれば、自分の経験や知識の中にその指示対象を見いだす場合もある。定冠詞がこのような機能を持つのは偶然ではなく、英語史的には定冠詞 *the* は指示詞 *that* から変化したものだからである。ちなみに、不定冠詞の *a(n)* は *one* が変化したものである。

このような定冠詞の基本的な機能は、いわばネイティブスピーカーの言語直感と言い換えても言い過ぎではない。したがって、この機能から、次のような定冠詞を用いる場合の原則を導くことができる。談話の中で定冠詞を用いる場合の原則はこれにつきる。

【定冠詞の原則】

いま話そうとしている対象について、話し手が、聞き手は場面や文脈、あるいは聞き手の経験や一般的な知識からすぐにそれとわかるはずだ、と判断したとき、話し手はその対象を定冠詞 *the* を用いて表す。

(この原則は、話し手を書き手、聞き手を読み手に読み替えれば、文章においても同様に当

てはまる。)

したがって、話し手が聞き手はすぐにそれとわかるはずだと判断して“Have you fed *the* cat?” (その猫にえさをやってくれたかな)と質問した場合でも、聞き手にとってそれがどの猫かすぐにはわからないこともある。このような場合、聞き手は“WHICH cat?”と聞き返すことになる。これは、話し手の判断、すなわち「聞き手はすぐにわかるはずだ」という判断が誤っていたということを表している。

このように、定冠詞を使用するかしないかということは、「話し手と聞き手、あるいは書き手と読み手が構成する場面や文脈、あるいは経験を含む一般的な知識しだいで決まる」ということができる。同じことが情報構造における新情報と旧情報の区別にも当てはまることに注意したい。⁴

このような定冠詞の原則が実際にはどのように機能しているか、先ほど例示した[A]から[F]までの例を用いて考えてみることにしよう。[A]の例で *the bench* としたのは、先行文脈を見ればどのベンチを指しているか聞き手にはわかるはずだと話し手が判断したからである。[C]と[D]では、後続文脈を見ればわかると判断したからである。[B]や[E]の場合は、場面を見れば明らかだと判断したからである。[F], [G], [H]の例では、私たちの一般的な知識や常識からそれとわかるものを示していると判断したからである。

1. 3 不定冠詞の原則

これまで述べてきた定冠詞の機能と原則が理解できれば、不定冠詞の用法は難しくはない。定冠詞の原則が当てはまらない場合には、不定冠詞を用いることになる。(もちろん、対象は単数のものに限られる。)⁵すなわち不定冠詞の原則は次のようになる。

【不定冠詞の原則】

いま話そうとしている対象について、話し手が、聞き手は場面や文脈、あるいは聞き手の経験や一般的な知識からすぐにそれとはわからないと判断した場合には、その対象を不定冠詞 *a/an* を用いて表す。

不定冠詞は、典型的には談話にはじめて登場したものや聞き手にとってなじみのないものを表すのに用いるが、これは上に述べた不定冠詞の原則から導くことができる。定冠詞と不定冠詞の機能の違いがはっきりわかる例を見てみよう。

(4) a. *The house* on the corner is for sale.

(角のあの家が売りにでている)

b. *A house* on the corner is for sale.

(角にある一軒の家が売りにでている)

定冠詞を用いた(4a)と不定冠詞を用いた(4b)の意味の違いは、話し手が聞き手の知識をどのように考えているかということを反映している。いま話題にしている「角のあの家(*The house on the corner*)」といえば、どの家のことか聞き手には分かっていると思えば、(4a)を用いる。そうでなければ(4b)を使うことになる。

つぎに新聞記事からの例を見てみることにしよう。

(5) Residents of Sumida Ward, Tokyo, are in a tug-of-war over a plan to sell betting tickets for races outside Tokyo at the end of this year at Wins Kinshicho, an off-track betting outlet near the south exit of JR Kinshicho Station in the ward.

(*The Daily Yomiuri*, 09/15/99)

(東京都墨田区の住民は東京以外で開催されるレースの馬券を年末から同区 JR 錦糸町駅南口近くの場外馬券場ウィングス錦糸町で販売する計画をめぐって激しい綱引きをおこなっている)

文頭の *residents* は読者にとってどの住民かわからない。したがって、この記事の記者は定冠詞の原則に合わないと考えるところが、*residents* は複数形なので不定冠詞 *a/an* とともに用いることはできない。複数形の名詞はそのまま不定の意味を表す。その結果、ここでは *residents* という複数名詞句を用いたのである。もしこれを *The residents* と定冠詞を用いて表記すると、ネイティブ (英語の母語話者) の読者はまずいらいらして、“Who?!” と聞かずにはいられないはずである。これは日本の新聞記事の冒頭で、いきなり「東京都墨田区のその住民は…」と書きはじめれば、「その住民って誰」と感じるのと同じ理由である。

a tug-of-war や *a plan* も読者にとっては、それがどのような綱引き (論争) かどのような計画かわからないので不定冠詞を用いている。*betting tickets* と *races* も *residents* と同じ理由で冠詞がついていない。ところが、読者にとって「年末」、あるいは「錦糸町駅南口」というのは自分の知識や経験からそれとわかるものである。したがって、定冠詞を用いて *the end of this year*、あるいは *the south exit of JR Kinshicho Station* と表しているのである。また、文末で *the ward* と定冠詞を用いて表記したのは、文頭で *Sumida Ward* が導入済みであり、読者にとってすぐにそれとわかるからである。

1. 4 “余分な the” と冠詞の指導

『日本人の英語』の著者であるマーク・ピーターセンは、日本人の書いた英文を見ると余分な *the* が圧倒的に多いと指摘している。⁶

(6) The international understanding is a commonly important problem in both the West and Japan. (ピーターセン, 1988: 25)

この文を読むとネイティブの読者はいらいらして、“What?” と聞かずにはいられないという。“The” から始まるので、ある特定の「国際的協約」を指しているように思わせるが、その後を読み進めても具体的に何のことが明らかにされていないからである。「国際理解」という漠然とした概念のことをいうならば、定冠詞を用いず *international understanding* としなければならぬと解説している。

このような誤った冠詞の使用例は、大学生の卒業論文のタイトルにもしばしば見かけられる。たとえば、「英語の未来表現の研究」を *the* を用いて “The Study of Future Expressions in English” としたり、「談話における形容詞の分析」というタイトルを “The Analysis of Adjectives in Discourse” としてしまう誤用例をあげることができる。このように下線部に定冠詞を用いると、「読者にもすぐにそれとわかる特定の研究」、「読者にもすぐにそれとわかる特定の分析」という意味になり、一学生の卒業論文のタイトルとしてはふさわしくないものと理解される。このような場合、*the* を *a/an* に置き換え、“A Study of Future Expressions in English”, あるいは “An Analysis of Adjectives in Discourse” とすれば正しい英語のタイトルになる。

このような“余分な *the*”の現象を冠詞の機能という観点から見直してみると、*the* をつけた名詞が聞き手にはっきりと確認できるほど十分に限定されていないことがわかる。このために、その名詞句が具体的に何を指すのかわからず、結果として不適切な *the* の使用ということにな

るわけである。したがって、the をつけた名詞が何を指すのか聞き手や読者にわかるような情報を補い、その名詞句を十分に限定すれば、the の使用は許されることになる。

(7) The recent important studies have been made into the cause of bullying.

(最近、いじめ問題の原因について、重要な研究が行われています)

(8) Very few people seem to be taking seriously the recent important studies that have been made into the cause of bullying. (ピーターセン, 1988: 25-26)

(いじめの原因について最近行われている重要な研究をまともに受け止める人は少ないようです)

(7)の太字の the は“余分な the”を用いている不適切な文である。この文を適切な文にするには、二つの方法がある。ひとつは、この“余分な the”を取り除くことで解決する。この場合、どの研究とは限定せず、一般的な意味で「重要な研究」という意味になる。もう一つは、(8)の太字部分のように、関係代名詞 that を用いて the recent important studies が何の研究か具体的にそれとわかるように限定してやれば適切な文となる。このことから、定冠詞 the を用いる場合には、the をつけた名詞が何を指すのか聞き手や読者にすぐにそれとわかるようしておく必要があるのである。

マーク・ピーターセンは、このように日本人が the を多用するのは、the をつけた方がそれだけ英語らしく聞こえるからではないかという理由を挙げている。⁷一見、この指摘は当を得ているように思われる。しかし、その根本的な原因は、氏のあげた理由ではなく、むしろ冠詞の指導上の問題に求めることができると思われる。定冠詞の指導においては、[A]-[H]にあげた定冠詞の用法をリストとして提示するにとどまり、これらの用法を裏で支えている原則、すなわち、これまでこの節で解説してきた冠詞の機能と使用上の原則という観点に立った指導はほとんどなされていないのが現状である。このため、生徒は大変な労力ををかけてこのリストの暗記につとめるが、このリストにあてはまらない実際の場面や、談話の中では、どのように冠詞を用いたらよいかかわからず、いつまでたっても冠詞の使用に自信がもてないのである。そこで the をつけた方が英語らしいと勘違いし、その結果が“余分な the”となって現れてくると考えられるのである。

この節で取り上げた冠詞の機能は、いわばネイティブスピーカーの言語直感をそのまま反映したものと考えてよい。これをよく理解し、これから導かれたわずか二つの原則、すなわち、**【定冠詞の原則】**、および**【不定冠詞の原則】**を身につければ、実際の場面や談話に応じた適切な冠詞を用いることができるようになり、冠詞に関しては、会話や文章を書く際にも不安なく使うことができるようになるということが出来る。さらに、英文を解釈する際にも、次の例のような冠詞に込められた話し手や書き手の意図や微妙なニュアンスを正確に理解することができるようになるはずである。

(9) Japanese arranged marriage has recently become a subject of wide interest in the United States.

(日本のお見合いは、最近、アメリカで広く興味を集めている話題となっている)

(10) Japanese arranged marriage has recently become the subject of wide interest in the United States.

(日本のお見合いは、最近、アメリカで広く興味を集め、注目のまとなっている)

(ピーターセン, 1988: 24-25)

(9)の a subject の場合、「広く興味を集めている話題」がいくつかあり、そのうちの一つという意味になるのに対し、(10)の the subject の場合は、当然聞き手にもそれとわかる「一つしかない注目のまと」という意味になる。

2. 語一的結束性

いくつかの文が集まって全体として一つのまとまりのある一節をテキストという。このテキストをテキストたらしめている特徴として、Halliday and Hasan (1976)は同一物指示(co-reference)、代用(substitution)、省略(ellipsis)、接続(conjunction)、語一的結束性(lexical cohesion)をあげている。この章では、同じ語句や同義語をくり返すことで意味的なつながりを確保し、談話の結束性に貢献する語一的結束性について考えていくことにする。

(11) I turned to *the ascent of the peak*. *The ascent* is perfectly easy.

(私は頂上への登りに取りかかった。その登りはとても楽だった)

この文では、同一語句(*the ascent*)をくり返すことによって先行文脈と意味的なつながりを維持し、テキストの結束性に貢献している。これ以外にも結束性をもたらす例としてつぎのようなものがある。

(12) I turned to *the ascent of the peak*.

a. *The climb* is perfectly easy. (その登坂はとても楽だった)

b. *The task* is perfectly easy. (その作業はとても楽だった)

c. *The thing* is perfectly easy. (そのことはとても楽だった)

(12)のそれぞれの文は、論理的には同じ意味を伝えているが、(12a)では ascent の同義語(synonym)である climb が用いられている。(12b)では、ascent の代わりに task が用いられている。task は ascent を意味的に包括するので ascent の上位語(superordinate)という。(12c)では、一般語(general word)である thing が用いられている。(11)-(12)の例に見られるような同一語句の反復や同義語、上位語・下位語、一般語などの語いを適宜選択することによってもたらされる結束性を語一的結束性という。⁸

ここで注意したいのは、これらの ascent, climb, thing 等の名詞は、単独では指示機能がないうことである。いずれも定冠詞 the とともに用い、名詞句となっはじめて指示機能を持つことができるのである。したがって、the climb, the task, the thing などの名詞句は、前節で述べた定冠詞の機能、すなわち「場面、あるいは文脈や一般的な知識の中を探しなさい。定冠詞のついた名詞によって指し示されるものが、それとわかるはずだ。」という機能の助けを借り、先行文脈にある先行詞を参照することによって、それぞれの名詞句の意味解釈をすることができるのである。たとえば、(12a) *The climb* (その登坂)は先行文の *the ascent of the peak* を参照することによって「その頂上への登坂」と解釈することができる。(12b)の *The task*, (12c)の *The thing* も同様である。

このように、談話において同一語句、同義語、上位語(下位語)、一般語を用いることにより、文と文の意味的なつながりを維持することができ、テキストを構成しているわけである。この意味で同一語句の反復や、同義語、上位語(下位語)、一般語は談話の結束性に貢献することができる。以下の節では、反復、同義語、一般語が実際の談話ではどのように用いられているか、具体例をあげて見ていくことにする。

2. 1 反復

談話では、同一語句を反復して用いることにより、読み手の注意を喚起し、それが話題の焦点であることを示すことができる。しかし、加藤(2000)でも指摘したように、英語は同じ語句のくり返しを嫌い、これを多用するとテキストが単調になるおそれがある。これをさけるにはいくつかの方法があるが、ここでは(i)反復語句の移動、(ii)部分反復、(iii)品詞の転換について見ていくことにしよう。

(i) 反復語句の移動

(13) *Critics* are often called the artists' parasites. *Critics* make their living telling other people what they should like. *Critics* do not judge art by some objective criteria. *Critics* consider what appeals to them to be good art. *Critics* call what doesn't appeal to them bad art. (Donnelly, 1994 : 97)

(批評家はしばしば芸術家の寄生虫と呼ばれている。批評家は芸術家はこうあるべきだということ人を人に話すことで生活の糧を得ている。批評家は何らかの客観的な基準で芸術を判断しているわけではない。批評家は自分の気に入るものをすぐれた芸術といい、自分の気に入らなければつまらない芸術というのである。)

このテキストでは、すべての文で *Critics* を文頭に置き、それを主語として文を始めているため、文章が単調になる。これをさけるには、反復する語句を文末や前置詞句の後に移動したりして変化を持たせる方法がある。この方法で(13)を書き換えると、次のようなつながりのよい文章になる。

(14) In artistic circles, *critics* are often called the artists' parasites. *Critics* make their living telling other people what they should like. However, do not make the mistake of thinking that *critics* judge art by some objective criteria. Good art is simply that which appeals to the *critic*. Bad art is that which does not appeal to the *critic*. (Donnelly, 1994 : 98)

(芸術の世界では、批評家はしばしば芸術家の寄生虫と呼ばれている。批評家は芸術家はこうあるべきだということ人を人に話すことで生活の糧を得ている。しかし、批評家は何らかの客観的な基準で芸術を評価しているなどと考えるような間違いをしてはならない。すぐれた芸術とは単に批評家の気に入るものであり、つまらない芸術は批評家の気に入らないものである。)

(ii) 部分反復

句(phrase)を反復する場合には、句全体を反復するのではなく、その一部やキーフレーズ(key phrase)をくり返すことでバリエーションを持たせることができ、テキストが単調になるのを防ぐことができる。

(15) *Einstein's theory of relativity* was one of the most important scientific advancements of the twentieth century. *The theory of relativity* has dramatically changed the way we view our universe. Because of *this theory*, we can no longer think of time and distance as absolutes. (Donnelly, 1994 : 98)

(アインシュタインの相対性理論は20世紀最も重要な科学的進歩の一つであった。相対性理論は私たちの宇宙観を劇的に変えた。この理論のために、私たちは時間と距離は絶対的なものであると考えることはできないのである。)

この例では、*Einstein's theory of relativity* が話題として導入された後は、その一部である *The theory of relativity*, あるいは *this theory* を部分的に反復することにより、結束性を保ちながらも冗長にならない工夫がこらされている。

(iii) 品詞の転換

名詞から動詞へ、あるいは動詞から名詞へ品詞を変えることによって、単調さを回避することができる場合がある。

(16) *The pollutants are ruining the lake. The chemicals pollute not only the water but the surrounding beaches.* (Donnelly, 1994 : 98)

(汚染物質がその湖をむしばんでいる。化学物質は水だけでなく周りの浜辺をも汚染しているのである。)

この例では、名詞 *pollutants* をくり返すかわりに動詞 *pollute* を用いている。さらに、たとえば、“Don't repeat the same word.” というところを、副詞 *repeatedly* を用いて “Don't use the same word repeatedly.” ということで同じ意味を伝えることができる。このように品詞を変えることによって文章が冗長になるのをさけることができるのである。

3. 2 同義語

英語には多くの同義語がある。書店に行くと英語辞典の横にはたいていシソーラス (thesaurus) と呼ばれる英語類義語辞典が並んでいる。手元にある *Webster's New World Thesaurus* で *baby* の項を見ると、赤ん坊の意味だけで *nursing, suckling, babe, child, toddler, tot, youngling, …* など16語が類義語としてあげられている。英語類義語辞典は、英米人に限らず、英文を書くことを仕事にしている人にとってはなくてはならない辞典である。最近のワープロソフトには、スペルチェックとともに類義語辞典も付属しているようである。なぜこのような辞典が必要かという、それはすでに述べたように、英語は同じ語句のくり返しを嫌う言語だからである。学生時代には、英作文の授業で「同一の段落では同じ語句はくり返さない」という原則を厳しく指導されたおぼえがある。それでは、くり返しをさけるために実際のテキストではどのような工夫がこらされているのであろうか。实例をあげて見てみることにしよう。

(17) *In other women's matches, defending champion Lindsay Davenport continued to roll with a 6-1, 6-1 romp past Amy Frazier. No. 5 Mary Pierce beat Angeles Montolio by 6-0, 7-6 (7-4). No. 16 Conchita Martinez downed Elena Dementieva 6-2, 2-6, 6-4.* (AP-the Daily Yomiuri, 09/6/99)

(他の女子の試合では、去年の優勝者リンゼイ・ダベンポートは6-1, 6-1でアミー・フレイジャーを楽々と片づけた；第5シードのメアリー・ピエルスはエンジェルズ・モントリオを6-0, 7-6 (7-4)で破った；そして16シードのコンチタ・マルチネスはエレーナ・デメンティエバを6-2, 2-6, 6-4で倒した。)

これはテニスの US Open の記事である。報道文のスポーツ記事では、このように相手を倒す表現がくり返し使われるが、同じ語句の使用による冗長性をさけるために多くの工夫がこらされている。その一つが同義語の使用である。(17)の例では、*romp past* (楽勝する), *beat* (打ち負かす), *down* (打ち破る) などの同義語が用いられている。スポーツ記事では、このほかにも *defeat* (負かす), *breeze past* (さっさと片づける), *knock off* (打ち負かす), *dispatch* (さっさと送り出す), *oust* (追い出す) などの動詞や *victory over* (~に対する勝利), *win against/*

over (～に対する勝利) などの名詞+前置詞がよく用いられる。

このように、適切な同義語を用いることでテキストが単調になるのを回避できる。しかし、気をつけなければならないのは、単語の意味はそれが用いられている文脈によって決まるということである。answer の同義語として refute が類義語辞典のリストにあがっていても、John answered the question. (ジョンはその質問に答えました) と John refuted the question. (ジョンはその質問に反論しました) とは、文の意味に違いがあるのはいうまでもない。

2. 3 上位語・下位語, 一般語

次の例では、上位語を用いて談話の結束性を維持している。

(18) There was a fine old *rocking-chair* that his father used to sit in, a *desk* where he wrote letters, a nest of small *tables* and a dark, imposing *bookcase*. Now all this *furniture* was to be sold, and with it his own past. (McCarthy, 1991 : 66)

(彼の父がよく座っていた古い立派なロッキングチェア、手紙を書いた机、小さな重ねテーブルと濃い色の堂々とした書棚がありました。このすべての家具は売却されることになっていた。そして彼自身の過去もそれ (=家具) とともに (失われるのであった)。

この例文の第2文では、机やテーブルといった個々の家具の上位語である furniture が用いられている。上位語は、このようにいくつかの下位語を一つのより包括的な語いでまとめることにより、談話の展開を要約するという機能を持つといえる。⁹さらに、一般語の使用によっても結束性を保ちつつ、冗長性をさけることができる。ここでいう一般語というのは、語の意味を抽象化し、一般化した語のことである。たとえば、文脈によっては、アスピリンのことを「もの」という一般的な語で呼ぶことがある。英語の aspirin (アスピリン) は、文脈に応じて同義語である pain reliever (鎮痛剤)、上位語に相当する drug (薬)、さらに一般語である stuff / thing (もの) と言い換えることができる。人については people, human (being), person, 動物については animal, creature, ものについては thing, object, stuff, さらに抽象的な概念については、idea, concept, fact などの一般語を用いて表すことができる。

3. 4 定名詞句表現

報道文などでは、次のように固有名詞を定名詞句、すなわち「定冠詞+普通名詞」によって言い換えることによって結束性を保持する例をよく見かける。

(19) MUNICH (AP) World No. 1 *Andre Agassi* made a quick exit Thursday from the most lucrative tournament in the world and talked little about his relationship with Steffi Graf, who was not there to see him lose.

At least *the world's top-ranked player* pocketed \$425,000 to sweeten his 6-0, 6-7 (2-7), 6-4 loss to Tommy Haas, a 21-year-old German.

(*The Daily Yomiuri*, 10/ 2, /99)

(ミュンヘン (AP 電) 世界ランク一位のアンドレ・アガシは世界でもっとも得なトーナメントから木曜日に早々と立ち去り、シュティフィ・グラフとの関係についてはほとんど語らなかった。彼女は会場には現れず、彼の敗戦を見ることはなかった。世界のトップにランクされるこの選手は少なくとも42万5千ドルを手にし、21歳のドイツ人であるトミー・ハースに 6-0, 6-7 (2-7), 6-4 で破れた気分を和らげた。)

(20) *Irabu* (11-6) allowed five hits, walked two and struck out eight. *The right-hander* won for the first time since Aug. 20 and improved to 4-1 in five career starts against Cleveland. (AP-*The Daily Yomiuri*, 09/ 18, /99)

(伊良部 (11勝 6 敗) は 5 本のヒットを許し, 二人を歩かせ, 8 人をストライクアウトにした。この右腕投手は 8 月 20 日以来はじめての勝利を手にし, これまでの対クリーブランド戦 5 回の先発を 4 勝一敗とした。)

例文 (19) の第 2 段落では, *Andre Agassi* のことを *the world's top-ranked player* と定名詞句表現を用いて言い換えている。また, 例文 (20) では, *Irabu* をくり返す代わりに *the right-hander* と定名詞句表現を用いている。

英語の談話では, このように登場する人物や物事などの固有名詞を定名詞句表現で表すことがきわめて一般的に行われている。これは冗長性を下げ, 結束性を維持するだけでなく, 他の語句で言い換えることにより, 同じ人物や物事について新しい情報やニュアンスを付け加えることができ, 読み手の興味を引くことができるからである。

これに対して, 日本語は英語ほど同じ語句の反復に対して厳し制限はない(加藤(2000)参照)。このことから, 日本人が英語を学習する際に 2 つの困難な問題点が生じると考えられる。一つは, 英語を話したり, 英文を書く場合に, 同じ語句をそのままくり返して用いてしまうため, 会話が冗長になったり, しまりのない幼稚な文章であるという印象を与えてしまうおそれがある。第 2 の問題点は, ネイティブスピーカーの英語を聞いたり, 英文を読んだりする際, 登場人物などが (19), (20) で見たように, 定名詞句表現を用いて言い換えられていることに気づかないため, 話をよく理解できなかつたり, 誤解してしまう場合があるということである。これについて, 具体例を見てみよう。

(22) MOSCOW (Reuter)-Russia, in one of its boldest foreign policy moves in months, announced Tuesday it would join the United States in delivering aid to former Yugoslavia via airdrops.

...Use of NATO bases by Russian planes would mark unprecedented cooperation between the Russian military and its old Cold War adversary.

(*The Daily Yomiuri*, 03/ 4/93)

(モスクワ (ロイター電) ロシアは, 過去数ヶ月のうちでもっとも大胆な外交政策手段の一つとして, 元ユーゴスラビアに対する空中投下による救援物資送付について, アメリカ合衆国に同調する声明を火曜日に発表した。(中略) ロシアの航空機による NATO (北大西洋条約機構) 基地の使用は, ロシア軍とその冷戦時代の敵国との間の先例のない協調関係を示すものである。)

この例では, 第 1 段落の *the United States* が後続の文脈で *its old Cold War adversary* と言い換えられている。この場合, *its old Cold War adversary* を「その (ロシアの) 冷戦時代の敵国」と訳すだけでは正しい解釈は得られない。この定名詞句表現が *the United States* を言い換えたものであり, 実際は「アメリカ合衆国」のことを指すということまで踏み込んで解釈しなければ, この記事を正しく理解したとはいえないのである。

このように結束性を維持しながら, 固有名詞の反復をさけるために用いられた定名詞句表現の解釈は, ときには英語の学習者, とくに基礎的レベルの学習者にとって難しく感じられることがある。このような場合, 英語の指導者は次のような指示を与えることは有益なことである

と思われる。

1. いま読んでいる文章は結束性が保たれた、まとまりのあるテキストであるはずだ、という観点に立つ。
2. したがって、この定名詞句表現は、先行文脈にある語句と何らかの意味的関連性を持っているはずだ、という見込みを抱いて、もう一度、先行文脈を見直す。
3. 定名詞句表現の定冠詞 the の機能「場面、文脈、一般的な知識の中を探しなさい。定冠詞のついた名詞によって指し示されるものが、それとわかるはずである、という合図を送っている」ことを再確認する。
4. その先行文脈で、性・数の一致や語意的意味を手がかりにして、この定名詞句表現と意味的、形式的（文法的）関連性を持つ語句（先行詞）を見いだす。
5. このようにして得られた定名詞句表現の最初の暫定的な解釈が、後続の文脈の中で矛盾を生じなければ、その解釈が正しい解釈である。

このような手続きを踏むことによって、かならずその定名詞句表現の正しい先行詞を見つめることができる。¹⁹英語の指導者は、先に指摘した第2の問題点、すなわち、英語では同一語句の繰り返しをさけるために、定名詞句表現による言い換えが半ば義務的に行われるが、学習者はこの言い換えられた表現の先行詞をししばしば見失うため、正しい解釈を得られない場合があるということであらためて認識し、談話の結束性という観点を取り入れた指導の可能性を探ることは、きわめて有益なことと思われる。

*本研究は、平成11-12年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）（2）、課題番号11610491の援助を受けてなされた研究の一部である。また、本研究は上越教育大学情報処理センターJUEN SYSTEMの支援を受けている。

注

1. Halliday and Hasan (1976), 加藤(2000)を参照。
2. 用法と用例は、安井(1982)から引用した。
3. 安井(1982: 65)は「定冠詞のもっとも基本的な機能は、「周りを探せ。そうすれば、定冠詞のついた名詞によって指し示されるものがそれとわかるはずである。」という合図をすることにある、と述べている。Halliday (1985: 292)は、定冠詞の機能について、“the has a specifying function; it signals 'you know which one (s) I mean'.”と指摘している。Quirk, et al.(1985: 265)は、“The definite article is used to mark the phrase it introduces as definite, i.e. as 'referring to something which can be identified uniquely in the contextual or general knowledge shared by speaker and hearer'.”と解説している。
4. 加藤(1997)を参照。
5. Quirk, et al. (1985: 272) は、“The indefinite article is notionally the 'unmarked' article in the sense that it is used (for singular count nouns) where the conditions for the use of the do not obtain. That is, a/an X will be used where the reference of X is not uniquely identifiable in the shared knowledge of speaker and hearer.”と指摘し、不定冠詞は無標の冠詞であり、定冠詞使用の条件に合わない場合をすべてカバーする冠詞である

と考えている。

6. マーク・ピーターセン(1988:25-28)を参照。
7. マーク・ピーターセン(1988:20-28)を参照。
8. Halliday and Hasan (1976:274)を参照。
9. McCarthy (1991:66)を参照。
10. 本稿では、詳しく論ずる余裕はないが、照応表現、冠詞、定名詞句表現など推論が関与している語句の解釈に関しては、談話の結束性だけではなく、Sperber and Wilson (1986, 1995)が提唱する発話解釈の基本原理解である「関連性理論(Relevance Theory)」が深く関与していることを注記しておきたい。

参 考 文 献

- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell Publishers.
- Donnelly, C. E. (1994) *Linguistics for Writers*. New York: State University of New York Press.
- Fox, B. (1987) *Discourse Structure and Anaphora*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, H.M.K. (1985) *Introduction to Functional Grammar*. London: Arnold.
- Halliday, H.M.K. and R. Hasan. (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- 加藤雅啓(1997)「情報構造と談話における受動文の機能」『上越教育大学研究紀要』第16巻第2号 pp. 565-581.
- 加藤雅啓(2000)「談話における結束性とその指導(1)―同一物指示―」『上越教育大学研究紀要』第19巻第2号 pp. 733-746
- Linde, C. (1979) "Focus of attention and the choice of pronouns in discourse," in T. Givón (ed.) *Syntax and Semantics, Vol. 12: Discourse and Syntax*. New York: Academic Press.
- マーク・ピーターセン(1988)『日本人の英語』東京：岩波書店
- 牧野成一(1980)『くりかえしの文法』東京：大修館書店
- McCarthy, M. (1991) *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moe, A. J. and J.W. Irwin. (1986) "Cohesion, coherence and comprehension," in J.W. Irwin (ed.) *Understanding and Teaching Cohesion Comprehension*. International Reading Association.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sperber, D and D. Wilson (1986, 1995²) *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwell.
- Thavenius, C. (1983) *Referential Pronouns in English Conversation. Lund Studiees in English 64*. Lund: Liber Laromendel Lund.
- 安井稔(1978)『新しい聞き手の文法』東京：大修館書店
- 安井稔(1982)『英文法論叢』東京：開拓社

Cohesion in Discourse and its Instruction (2) — With Special Reference to “Article” and “Lexical Cohesion” —

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This paper is concerned with a comparative pragmatic analysis of cohesion in English and Japanese discourse. If a speaker of English or Japanese hears or reads a passage of the language which is more than one sentence in length, the speaker usually identify without difficulty whether it forms a text or is just a collection of fragments of sentences. This paper inquires into what makes the difference between the two with special reference to articles and lexical cohesion in the framework of Halliday and Hasan (1976).

* Division of Languages: Department of Foreign Languages